『源氏物語』の召人について

――真木柱巻の方法をめぐって――

青島　麻子

一、平安朝における「召人」の用例

いわゆる「召人」と呼ばれる人々に関する研究においては、阿部秋生氏[1]の召人論が記念碑的なものであろう。氏は平安朝の文学作品の検討から、召人とは「自分の仕へてゐる主人又は主人格の男性と肉体的関係をもつてゐる女房のこと」であり、事実上妻と同様でありながら女房であることに変わりはなく、妻の如き待遇を求めることは不可能な存在であったと論じた。以上の氏の定義は今や通説化しており、以降散見する召人についての論考[2]は、いずれもその解釈を阿部氏の定義に従っていると言えよう。

近年、平安朝の婚姻形態における議論はますます盛んになっているが、その際、「召人」については考慮の外とされることがしばしばある。男君と性的関係を有し、それが半ば公然と認められているとは言え、あくまで女房と主人という主従関係によって結ばれている「召人」は、「妻」の範疇には含め難いと考えられているためであろう。けれども一方で、「召人」と「妻」との境界性に関しても未だ議論が絶えないところである。一体「召人」とはどのような存在であるのだろうか。実際、平安時代の文学作品において「召人」の語[3]は、『大和物語』に一例、『うつほ物語』に三例（但し楽人を指し示す用例八例を除く）、『蜻蛉日記』に一例、『源氏物語』に二例、『栄花物語』に一例見出されるのであるが、その用例を以下に確認してみたい。

『大和物語』における用例は、「在次の君」が密かに通っていた、伊勢守の「召人[4]」のもとに、在次の君の兄弟も通っ

ていたことが明らかになったという話（一四三段・在次の君・三六二〜三六三）に見え、ここからは召人との非排他的な男女関係が窺える。これと似通うのが、『蜻蛉日記』の近江（藤原国章女）であろう。「失せたまひぬる小野の宮の大臣（＝藤原実頼）の御召人ども」（中・二〇三）の一人として登場し、兼家との間に綏子を儲けた女性である。彼女は兼家に対して「召人」と呼ばれることはないのであるが、後に兼家の息道隆との間にも子供を儲けており、『栄花物語』では「いと色めかしう、世のたはれ人に言ひ思はれたまへる」（さまざまのよろこび・①一四一）などと言われる、色好みの女であった。

『うつほ物語』における「召人」の語は、いずれも兼雅の召人を指している。彼女たちは俊蔭巻において、俊蔭女と仲忠を都に迎えようとした兼雅が、一条殿には「院の帝の女三の宮を始め奉りて、さるべき親王たち・上達部の御娘、多くの召人まで集め候はせ」（俊蔭・四九）ていたため、具合が悪いと思案する場面に顔を見せていたが、後の蔵開中巻で再登場する。

寝殿は、東の対かけて、宮住み給ふ。異対どもに、すこしはひとつはらう、召人めきたりし人、対一つを二人にて住む。池面白く、木立ち興あり。やうやう毀（こぼ）れもてゆく。これを、梨壺の君に、父おとどの奉り給ひけるなれば、宮ぞぬしにて住み給ふ。異人は、上達部・親王たちの御娘なれど、親もものし給はず、ただ、おとどに懸かり給ひたりしかば、「今、かかり」とて、よその家なむなければ、え別れ給はぬなり。召人めきたりし人々、あるは、次々に従ひてまかでにけり。

（蔵開中・五六三）

兼雅と疎遠になった後も一条殿に留まる他ない、後見をなくした「上達部・親王たちの御娘」などと異なり、召人たちは荒廃した邸をいち早く去っている。これは彼女たちが、後見の有無とその処遇が密接に関わる「女君」たちとは異なり、あくまで女房に過ぎないということの証左であろう。召人と男君との結びつきは雇用関係が第一義であるため、愛情を媒介にした不確かな繋がりに依拠することなく、次の出仕先を探し求められるということなのである。これに関して、『栄花物語』において兼家の「御召人」として登場する大輔が想起される。彼女は元来、兼家の娘である超子の女房であった。

大殿年ごろやもめにておはしませば、御召人の典侍のおぼえ、年月にそへてただ権の北の方にて、世の中の人名簿し、さて司召のをりはただこの局に集る。院の

女御の御方に大輔といひし人なり。

（さまざまのよろこび・①一七〇）

大輔は実質的には「妻」と同等の役割を果たしているようでもあるが、あくまで局住みをしていることは看過し得ない。『栄花物語』において彼女は「権の北の方」と表現されるに留まっており、いくら大輔を寵愛しようとも、時姫没後の兼家はあくまで「やもめ」であると理解されていたことが窺えるだろう。

一方、『源氏物語』における「召人」の用例は、以下の二例である。

Ⓐ「…宮は、独りものしたまふやうなれど、人柄いといたうあだめいて、通ひたまふ所あまた聞こえ、召人とか、憎げなる名のりする人どもなむ数あまた聞こゆる。さやうならむことは、憎げなうて見直いたまはむ人は、いとようなだらかにもて消ちてむ。すこし心に癖ありては、人に飽かれぬべきことなむ、おのづから出で来ぬべきを、その御心づかひなむあべき。…」

（胡蝶③一八〇～一八一）

Ⓑ御召人だちて、仕うまつり馴れたる木工の君、中将のおもとなどいふ人々だに、ほどにつけつつ安からずつらしと思ひきこえたるを、北の方はうつし心ものしたまふほどにて、いとなつかしううち泣きてゐたまへり。

（真木柱③三六〇）

Ⓐは玉鬘の婿候補である螢兵部卿宮についての光源氏の評、Ⓑは玉鬘との結婚後の髭黒の家庭の記述である。召人が妻とは一線を画する存在であり、螢宮の数多の召人の存在は、「兵部卿宮、はた、年ごろおはしける北の方も亡せたまひて、この三年ばかり独り住みにてわびたまへば」（胡蝶③一七〇）との記述と矛盾しないのは、前掲の用例と同様である。

『源氏物語』において「召人」の語が使用されるのは以上の例のみであるが、一般的には、たとえ「召人」の用語が用いられていなくとも、光源氏に対する中将の君・中務の君・中納言の君や、薫に対する按察の君・小宰相の君なども「召人」として捉えられている。これは、「この女性達は、女房であり、その主人格の男性との情交関係を軸として語られてゐるのであつて、彼女等もまた召人であつたことは認めなければなるまい」との阿部氏の説に拠るものである。しかしながら、「妻」の概念の曖昧性と相まって、「召人」の語の指し示す範囲は徐々に拡大している。限りなく女房に近い女君と言える明石の君や浮舟をはじめとして、紫の上や宇治中の君などまでをも「召人的性格を併せ持[5]」つもの

と捉える論もある。逆に和泉式部のように限りなく妻に近い女房などの存在もあり、「召人」の定義とは、婚姻研究の議論の混乱にも通じる重要な問題を孕むものと言えよう。

近年、木村朗子氏[6]は召人をめぐる研究史を整理し、玉上琢弥氏[7]が、『源氏物語』の召人をその用語が使用されている例に限定して解釈していることに着目した。木村氏は、阿部氏と玉上氏の方法を比較し、

> 阿部氏が当時の実態に則して召人の特徴を措定していくのに対し、玉上氏は「源氏もお手つきの女房はいたが、「召人」とは呼ばなかった」と述べるように、物語が召人をどう表現したかに重きを置いているという両氏の論点の違いを示している。

と述べた上で、玉上氏の視点を導入し、「召人を実体としてではなく、物語における一つの表現の方法として考察」している。平安時代において、主人と情交関係にある特別な位置づけの女房が存在したのは事実であり、そのような女房を「召人」と呼ぶことは何ら問題がないように思われる。けれども一方で「召人」を物語における表現の問題として捉え返す木村氏の視点は、大変有益なものではないだろうか。以下、『源氏物語』において敢えてその用語を用いて紹介された髭黒の「召人」を中心に、彼女たちが物語で果たしている役割について考察を加えてみたい。

二、源氏物語正編の召人

『源氏物語』における「召人」の用例は、前記のように玉鬘十帖の二例のみであるが、螢宮の召人は具体的に物語に登場することはない。前掲引用部Ⓐは、光源氏により螢宮の「召人」の存在への懸念が表明されることで、玉鬘の結婚相手としての難点が示されていたに過ぎない。一方で、引用部Ⓑで髭黒の「召人」とされた木工の君・中将のおもとに関しては、真木柱巻において度々物語の前面に迫り出しているのである。象徴的なのが以下の場面であろう。髭黒北の方が邸を去るに際して、北の方付きの中将のおもとはそれに追従し、髭黒付きの木工の君は邸に残ることになった。

> 木工の君は、殿の御方の人にてとどまるに、中将のおもと、
>
> 「浅けれど石間の水はすみはてて宿もる君やかけはなるべき
>
> 思ひかけざりしことなり。かくて別れたてまつらんことよ」
>
> と言へば、木工、

「ともかくも岩間の水の結ぼほれかけとむべくも思
　ほえぬ世を
　いでや」とてうち泣く。　（真木柱③三七四）

中将のおもとは、髭黒とは浅い縁であるはずの木工の君が邸に住み続ける一方で、宿守たるべき北の方が去らねばならない嘆きを詠み、一方の木工の君は、玉鬘に惑溺している髭黒への複雑な思いを根底に、専ら不安定な自身の身の上を嘆くことで切り返している。

この物語において、女房同士の和歌の贈答は他に三例見られるのであるが、いずれも女房が個としての感慨を吐露し合っているわけではない[8]。従って、ここで中将のおもと・木工の君という、主人公たる光源氏とは直接関わらない脇役の女房が、互いにその立場の違いを前面に出し、自己の個人的な感慨を述べた歌を詠んでいることは異例とも言えよう。光源氏の召人たちが、「中将、中務」などと一括して語られ、各々が代替可能であったのに対して、彼女たちは同じ召人でありながら、それぞれ異なる境地からその微妙な胸中を表明し合っているのである。以上のような真木柱巻における召人の前景化の問題を、物語の方法の一つとして考えてみることはできないだろうか。

それに先立ち、『源氏物語』正編においてしばしば言及される、光源氏の召人について見ておきたい。中務の君は、中納言の君とともに既に帚木巻で左大臣家の女房として登場していた（帚木①九一）が、召人として描かれるのは末摘花巻に至ってである。彼女は、末摘花をめぐる頭中将との争いにおける光源氏の優位性を示唆するかのように、大宮の顰蹙を買いながらも頭中将の懸想を断り、時折の光源氏との逢瀬を忘れ得ない（末摘花①二七四）。一方の中納言の君は、葵の上死後、光源氏の召人であったことが明かされ（葵②五九）、須磨退去直前には、婿として通っていた葵の上生前を思い起こすかのように[9]左大臣邸に宿泊し、彼女と一夜を共にしていた（須磨②一六七）。但し、以上の中務の君・中納言の君については前述のように左大臣家の女房であり、以下に見える二条院の同名の女房と同一人物と見なすことには慎重であるべきであろう。これについては後述したい。なお中将の君については、葵の上の忌みごもりを終え、二条院に帰邸した光源氏が、成長した紫の上に満足しつつも、その晩は中将の君に足を揉ませて就寝したとの記述（葵②六九）によって、情交関係が暗示されていた。互いに心を通わすことのなかった妻、葵の上も亡くし、藤壺の形代紫の上は未だ少女であるという状況下で、一対の男女として対峙する必要のない気楽な相手として、召人が選ばれたの

であろう。

これらの召人たちは、光源氏離京を機に紫の上に預けられ（須磨②一七七）、やがて彼女に心服していく。その後、須磨から帰京した光源氏が、「中将、中務やうの人々にはほどほどにつけつつ情を」（澪標②二八四）かけていることが述べられはするものの、紫の上が光源氏の好配として安定した地位を築いたことに依るものか、幻巻に至るまで、光源氏と召人の情交が物語で直接語られることはなくなるのである。以降彼女たちは、大堰に明石の君を訪ねる光源氏に、それを当てこする紫の上の歌を、中将の君が「いたう馴れて聞こゆ」（薄雲②四三九）という場面、新春の祝いに沸く六条院で光源氏に向かって、「私の祈りは何ばかりのことをか」――光源氏の栄え以外に望みはないと「我はと思ひあがれる中将の君」が述べる場面（初音③一四四）、明石一族との住吉参詣で、紫の上、明石女御に続いて中務の君が唱和をする場面（若菜下④一七四）などに散見する。これらの記述からは彼女たちの女房集団の中での突出した位置づけ[10]と、召人としての微妙な胸中が垣間見られよう。けれども、物語はそれ以上召人に焦点を当てて語ることはなかった。召人と光源氏との交渉は、基本的に語られる必要のない部分に属しているのである。

若菜巻における光源氏と女三の宮の結婚三日夜の場面においても、召人が登場する。

（紫ノ上）「…この宮のかく渡りたまへるこそめやすけれ。…」などのたまへば、中務、中将の君などやうの人々目をくはせつつ、「あまりなる御思ひやりかな」など言ふべし。昔は、ただならぬさまに、使ひ馴らしたまひし人どもなれど、年ごろはこの御方にさぶらひて、みな心寄せきこえたるなめり。他御方々よりも、「いかに思すらむ。…」など、おもむけつつとぶらひきこえたまふもあるを、かく推しはかる人こそなかなか苦しけれ、世の中もいと常なきものを、などてかさのみは思ひ悩まむ、など思す。（若菜上④六六～六七）

光源氏を送り出した紫の上に、女三の宮降嫁によって六条院の秩序が崩されたことに不満を漏らす女房たちの会話が耳に入ってくる。女三の宮に対して自ら謙ることで穏やかに対処しようとする紫の上を見て、光源氏が「昔は、ただならぬさまに、使ひ馴らし」た中務・中将などが「あまりなる御思ひやりかな」と目配せを交わすのだが、ここでわざわざ召人の反応が語られていることに留意したいと思う。

三田村雅子氏は、召人的女房が「女君の苦悩の現場に立

ち合いながら、媒介項となることによって逆に女君を追いつめ、その苦悩を明晰化する役割を果している[11]」と論じていたが、その典型的な場面が当該箇所であろう。召人たちの反応に続けて、見舞いを寄せる他の妻妾たちの姿も描かれているが、これまで紫の上の下位に甘んじていた彼女たちが、今その絶対的な地位が揺るがされようとしている紫の上の胸中を透視しようとしていた。「かく推しはかる人こそなかなか苦しけれ」と、このように心内を忖度しようとする他人の眼が紫の上を窮迫していくのであるが、ここで言う他人とは、他妻妾たちはもとより、紫の上に心服していると叙述される中務・中将なども含まれよう。光源氏と情交関係にあるにも関わらず「妻」の序列から除外されていた彼女たちが、その妻妾集団の序列の動揺という事態に当たって、紫の上自身も見つめようとしていなかったその心底を、いち早く察知し、暴き立てようとしているのである。紫の上は、六条院の外に対しては勿論、その内部、さらには自身に近侍する女房たちに対しても常に気を張りつめざるを得ず、追いつめられ、やがて身体を蝕まれていくのであるが、当該場面での召人の反応は、このような彼女の孤独を露呈する役割を果たしていると言えよう。

紫の上亡き後、独り寝をかこつ光源氏の傍らには中納言の君・中将の君などが伺候していた（幻④五二四）。中でも中将の君は、同巻にしばしば登場し、他の六条院の女性を差しおきただ一人、光源氏の慰めとなっていたのである。光源氏の寵を受けた者として常に女君を見つめ、時には追いつめてきた者として、紫の上を偲ぶよすがとなり、その死後初めて浮上が許されたのであろう。

中将の君とてさぶらふは、まだ小さくより見たまひ馴れにしを、いと忍びつつ見たまひ過ぐさずやありけむ、いとかたはらいたきことに思ひて馴れもきこえざりけるを、かく亡せたまひて後は、その方にはあらず、人よりことにらうたきものに心とどめ思したりしものをと思し出づるにつけて、かの御形見の筋をぞあはれと思したる。心ばせ、容貌などもめやすくて、うなゐ松におぼえたるけはひ、ただならましよりは、らうらうじと思ほす。（幻④五二六～五二七）

但し、「うなゐ松」に例えられる幻巻の中将の君は、「一人ばかりは思し放たぬ気色なり。」（幻④五三九）と、光源氏の心を捉えるに足る年若い女という印象を与え、彼女を葵巻以来登場する「中将」と同一人物と見なすには年齢的に疑問が生じる。左大臣家の中務の君・中納言の君が二条院の同名の女房たちと同一人物かという疑問点は先述したが、

これらの女房たちをすべて連続した一人格と見る必要は無いのであろう。「中将」などの呼称が、この物語で召人的立場にある女房を指し示す普通名詞のようなものであることは既に指摘されている[12]のであるが、前述の三田村氏は、葵の上死後の中納言の君や、紫の上死後の中将の君などに着目し、召人の形代的役割を指摘した上で、彼女たちは亡き女君を偲ぶよすがとして、その都度都合のよい側面が付加されるに過ぎない存在であると論じている。さらに氏は、幻巻で中将の君がいつしか紫の上の似姿として光源氏の目に映ってくることに関して、「召人という身分の軽々しさがその安易な同一視を誘いこむ。彼女達が何物でもないが故に、彼女達は光源氏の最後の愛を受けうる者として浮上してくるのである。[13]」とも述べている。従うべき見解であろうが、ここで注意したいのは、光源氏の紫の上を哀悼する姿と、中将の君との交渉は互いに矛盾しないということである。召人というものが一つの統一的な人格を持つことが許されない存在である故に、その胸中は棚上げされ、紫の上の安易な形代となることが可能になったのである。

以上のように『源氏物語』正編において、召人というものはその殆どが光源氏の召人として登場していた。その中で、髭黒の召人が真木柱巻において度々顔を出し、かつその個人的感慨の吐露を許されていたのは注目に値しよう。これに関して陣野英則氏[14]は、髭黒の召人は光源氏のパロディとしての髭黒の家庭を内側から詳細に語り、光源氏の色好みを批判する役割を果たすと説いている。また三田村氏は、真木柱巻における彼女たちに、これ以前は女主人公の意識と一体化しそれを代弁するばかりであった召人の変貌を見、「観察者・批判者・解説者として、物語内語り手として、証人として、様々な機能を果しながら物語を立体化し、関係づける中軸的な役割を担[15]」うようになったと指摘する。両者ともに作中人物としての召人と、語りの問題との関連を見る論である。しかし、このように物語背後の語り手を実体化し、それを召人と同一視するのではなく、髭黒の召人の前景化についてはむしろ、真木柱巻の方法として考えるべきではないだろうか。

三、真木柱巻の多角的視点と髭黒の召人

そもそも髭黒は胡蝶巻で、玉鬘の求婚者の一人として初登場する（胡蝶③一七六）のだが、その際に光源氏は髭黒について以下のように評していた。

「…大将は、年経たる人の、いたうねびすぎたるを厭ひがてにと求むなれど、それも人々わづらはしがるなり。

さもあべいことなれば、さまざまになむ人知れず思ひ定めかねはべる。…」　（胡蝶③一八一）

ここで、光源氏の玉鬘への言葉を通じて髭黒の妻の存在が初めて語られる。彼は長年連れ添った年上の北の方を嫌って玉鬘に求婚してきたようであるが、既に歴とした妻を有する男性との結婚は躊躇されるというのである。この妻というのが、実は紫の上の異母姉であるのだが、その事実が明かされるのは玉鬘求婚譚も終盤の藤袴巻においてであることに留意したい[16]と思う。髭黒初登場から年立の上で約一年半の時間が経過している。

この大将は、春宮の女御の御兄弟にぞおはしける。大臣たちを措きたてまつりて、さし次ぎの御おぼえいとやむごとなき君なり。年三十二三のほどにものしたまふ。北の方は紫の上の御姉ぞかし。式部卿宮の御大君よ。年のほど三つ四つが年上（このかみ）は、ことなるかたはにもあらぬを、人柄やいかがおはしけむ、嫗とつけて心にも入れず、いかで背きなんと思へり。その筋により、六条の大臣は、大将の御事は、似げなくいとほしからむと思したるなめり。　（藤袴③三四二～三四三）

胡蝶巻では、光源氏の把握において「いたうねびすぎたる」ことにより髭黒に忌避されていると説明されていた北の方が、実は三、四歳の年長に過ぎないことが明かされ、傍線部のように、年齢ではなくむしろその「人柄」が問題であると捉え直されている。以上のようにここで北の方の人柄への懸念が語られていることは、次巻真木柱巻への布石であると言えよう。ここ藤袴巻に至って突如髭黒の系譜が明らかにされ、次期政権担当者候補としての重々しい位置づけや式部卿宮家との姻戚関係に言及されるのも同様に、真木柱巻頭で既成のものとして語られる髭黒と玉鬘の結婚、さらにその結婚が招来した髭黒一家の家庭騒動を意識してのものであろう。これまでは主に螢宮と共に登場し、風流な宮との対照として無骨な面のみに言及されていた髭黒の、政治的な面に新たに照明が当てられたのである。これによって彼は、単なる実直な一求婚者ではなく、光源氏、内大臣に次ぐ実力者として宮廷社会に堅固に組み込まれている人物とされた。このような髭黒の再設定も、真木柱巻における立体的な語り方と関連するものであろう。

①北の方の思し嘆くらむ御心も知りたまはず、かなしうしたまひし君たちをも目にもとめたまはず、なよびかに、情々しき心うちまじりたる人こそ、とざまかうざまにつけても、人のため恥ぢがましからんことをば、推しはかり思ふところもありけれ、ひたおもむきにす

くみたまへる御心にて、人の御心動きぬべきこと多かり。②女君、人に劣りたまふべきことなし。人の御本性も、さるやむごとなき父親王のいみじうかしづきたてまつりたまへる、おぼえ世に軽からず、御容貌などもいとようおはしけるを、③あやしう執念き御物の怪にわづらひたまひて、この年ごろ人にも似たまはず、うつし心なきをりをり多くものしたまひて、御仲もあくがれてほど経にけれど、やむごとなきものとは、また並ぶ人なく思ひきこえたまへるを、④めづらしう御心移る方の、なのめにだにあらず、人にすぐれたまへる御ありさまよりも、かの疑ひおきて皆人の推しはかりしことさへ、心清くて過ぐいたまひけるなどを、ありがたうあはれと思ひ増しきこえたまふもことわりになむ。

（真木柱③三五六～三五七）

髭黒北の方は②において、高貴な身分で世評も高く、なおかつ容貌も美しい女性であると紹介されている。ここで北の方が式部卿宮女とされていることに関しては、紫の上をめぐる継子譚の構造はもとより、人より優れた揺るぎない地位を設定することで、玉鬘の出現による、正妻の座からの転落の悲劇性をより高める働きを持つと言えよう。やんごとない扱いをされてきた者だからこそ味わう屈辱や、取り沙汰する世間の好奇の眼など、若菜巻の紫の上とも通じる問題を孕むところである。加えて①では、北の方に同情的な筆致で、玉鬘に耽溺する余り家庭を顧みなくなった直情径行な髭黒の行動が非難されている。

しかしながら、物語は北の方に寄り添ってその離別を同情的に描いていくようにも見える一方で、髭黒についてもその行動を正当化するような描き方をしているのであった。ここで③にあるように、北の方が元より物の怪に憑かれていた人物とされていることは看過し得ない。すなわち、髭黒と玉鬘との結婚による北の方の懊悩が新たに物の怪を誘因したのではなく、北の方はかねてより物の怪のため正気を失うことがあり、それによって玉鬘以前に既に夫婦仲は冷えていたと描かれているのである。従って④のように、光源氏との関係の疑惑も杞憂であった玉鬘に、髭黒が惑溺するのも当然であるとさえ表明されている。

このように玉鬘にすっかり夢中になった髭黒は、程なく自邸に彼女を迎えようとする。髭黒のこの仕打ちを嘆き悲しむ北の方たちの様子が記されているのが、第一節引用Ⓑであった。ここは「ほどにつけつつ安からずつらし」と嘆く召人たちの姿があることで、「なつかしううち泣」くばかりの北の方の痛切な心中が推察されるところである。この

後髭黒は北の方を終日慰めるものの、日が暮れるや心は玉鬘のもとへと逸る。外出の準備をする髭黒の描写に続くのが、以下の有名な場面である。

中将、木工など、「あはれの世や」などうち嘆きつつ、語らひて臥したるに、正身はいみじう思ひしづめてらうたげに寄り臥したまへり、と見るほどに、にはかに起き上がりて、大きなる籠の下なりつる火取をとり寄せて、殿の背後（うしろ）に寄りて、さと沃（い）かけたまふほど、人のやや見あふるほどもなう、あさましきに、あきれてものしたまふ。（真木柱③三六五）

右に関しても同様に、「あはれの世や」と嘆きを露わにする召人の描写があることで、それとは対照的に苦悩を内に沈めて堪える北の方の様子が際立つところではある。しかしながら「と見るほどに」以下では、北の方が髭黒に火取の灰を浴びせかけるという事件が起こり、舞台は一転して喜劇的な場面へと変化している。

そもそもこの一連の場面は、強力な後見を有する新たな妻の登場によりその座が揺るがされるという構図、嘆息する妻をなだめる夫の言、新たな妻のもとへの外出を促し夫の衣服に香を焚きしめる女の姿、召人の同情、背景の雪などの共通項により、女三の宮を迎えた紫の上との類似が指摘されるところであった。[17] しかしながら、紫の上はその懊悩を奥底に沈めこむことで、その心中の問題を深く掘り下げられてゆくのに対し、北の方は物の怪という狂気の形によって、その感情を一気に発現させてしまったという差異は決定的であろう。従って、若菜巻との比較において、真木柱巻では女君の内面を深化させるという地点には未だ至っていないとの指摘[18]も既に多くなされている。けれども、若菜巻に比して真木柱巻を問題の凝視が不十分と捉えるのではなく、真木柱巻自体の流れの中で北の方の物の怪を見るべきであろう。

うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへり見すべくもあらずあさましけれど、例の御物の怪の、人に疎ませむとする事（わざ）と、①御前なる人々もいとほしう見たてまつる。…（髭黒ハ）心違ひとはいひながら、なほめづらしう見知らぬ人の御ありさまなりやと爪はじきせられ、疎ましうなりて、あはれと思ひつる心も残らねど、このころ荒だててば、いみじきこと出で来なむと思ししづめて、夜半（よなか）になりぬれど、僧など召して加持まゐり騒ぐ。呼ばひののしりたまふ声など、思ひ疎みたまはんに②ことわりなり。（真木柱③三六六）

以上は、髭黒が北の方から灰を浴びせられた直後の叙述

である。女房たちは傍線部①のように、この常軌を逸した行動を北の方本人が関知しない物の怪の仕業とすることで、北の方への憐憫の情を喚起している。けれども物語は、女房たちの同情を語った直後に、髭黒の立場からも事件を捉え返しているのである。髭黒は、これは北の方本来の姿ではなく、物の怪ゆえの狂乱と思いなし堪えようとしつつも、その尋常ではない行動に彼女を疎ましく思う心を抑えられない。そのような髭黒の心中に対して、②の草子地で「ことわりなり」と共感の念が述べられているのであり、北の方の物の怪という特殊事態により、長年連れ添った妻を捨て去るという、髭黒の一見冷淡な行動も正当化されていると言えよう。

このように、物語は北の方を以前から物の怪に患い続けていた人物と造型することで、一方では煩悶する彼女に同情的な眼差しを注ぎつつも、その心理に完全に寄り添うことを避け、同様に髭黒の行動についても批判的に語りつつ同調しているのであった。すなわち、玉鬘に心を奪われた髭黒を単純に加害者と見なすのではなく、年来の北の方の狂気により、彼自身も被害者とも言い得るというように、物事が多角的に捉えられているのである。

ところで、髭黒の召人の描写についても同様に、物語の立体的な視点と関連づけて考えられないであろうか。

木工の君、御薫物しつつ、

「独りゐてこがるる胸の苦しきに思ひあまれる炎とぞ見し

なごりなき御もてなしは、見たてまつる人だに、ただにやは」と、口おほひてゐたる、まみいといたし。されど、いかなる心にてかやうの人にものを言ひけん、などのみぞおぼえたまひける、情なきことよ。

「うきことを思ひさわげばさまざまにくゆる煙ぞいとど立ちそふ

いと事のほかなることどもの、もし聞こえあらば、中間（ちゅうげん）になりぬべき身なめり」と、うち嘆きて出でたまひぬ。

（真木柱③三六八～三六九）

以上は、件の騒動の翌日、身繕いを整えた髭黒が、改めて玉鬘のもとへ向かおうとする場面である。ここで物の怪に苦しむ北の方に代わって薫き物をする木工の君が、北の方の胸中を代弁しているのだが、彼女の贈歌はそれだけに留まらない。すなわち、北の方の心情を詠む形を取りつつも、「見し」「見たてまつる人」との語を畳み重ねることで、自己を前面に出しており、傍線部のように、北の方の存在は後景に退き、木工の君と髭黒自身が直接対峙しているの

である。[19] けれども対する髭黒はその恨みに心動かされることなく、却って彼女の差し出がましさを疎ましく思い、召人風情に情を交わしたことを悔やむばかりであった。玉鬘に執心する余りの酷薄な髭黒の態度を印象づけられるところであるが、木工の君が個人として髭黒と向き合うことで、端無くも彼女の、決して「女君」にはなれない立場が露呈してしまっているのである。

光源氏の召人は、葵の上や紫の上の形代としてその追懐のよすがとなっており、宇治十帖に至っては、女房と女君の境界は更に曖昧になっていた。[20] それに対し、真木柱巻では中将のおもと・木工の君は「召人」と呼称されることで、女君との間に明確な線引きがなされ、決して同一視されることはなかった。すなわち、「妻」との間に越えがたい懸隔を有した、軽々しい身分に過ぎないことが明言されていたのである。しかしながらここで登場したのが単なる女房ではなく、自身も同じく髭黒の寵を受けた者として常に北の方を見つめてきた召人であることは重要であろう。前引の木工の君のように、女君の懊悩を最も理解し得る立場にありつつも、その心内に完全に密着し無条件に代弁者となることはできない者の存在が我々に印象づけられたことは、前述の北の方の物の怪の設定が照射する、物事の両義性を見つめる姿勢とも通じるところであると思われる。

四、結び

以上、「召人」を物語における表現の問題として捉え返し、『源氏物語』において唯一敢えてその用語を用いて紹介されている髭黒の「召人」の考察を通じて、真木柱巻の複眼的な視点を見てきた。玉鬘十帖を通しては、光源氏と玉鬘の危うい関係が描かれ続けていたのだが、両者の間に設定された「親子」という関係性が、二人を接近させると同時に桎梏ともなっていた。これに代表されるような各々の立場による苦悩と、その中での心情を掬い上げようとする姿勢は、玉鬘求婚譚の終巻たる真木柱巻に特徴的である。周知の通りこの巻では、玉鬘と髭黒の結婚の経緯を追うのではなく、それを既成事実としたところから語り始め、事件が人々にもたらした影響を描いていた。換言すれば、髭黒が玉鬘を手中におさめるまでの具体的な経緯ではなく、専ら一つの事件によって揺れ動く人々の心に筆が割かれていると言えよう。

伊藤博氏[21]は、野分巻以降真木柱巻において、光源氏の宰領に関わらぬ他者が比重を高めているということを指摘するが、特に真木柱巻においては、これまでの一元的世界か

ら解放され、多元的な視点が許容されることで、それらの相関、絡み合いを軸に物語が進展してゆくと言う。これは、当該巻で召人が迫り出してくることとも関連する。前述来のように、この物語において召人は、一個の人格を与えられず「普通名詞」的に点描されていたのであるが、真木柱巻における髭黒の召人たちはこれとは異なり、各々の個としての微妙な胸中が呈されていた。このような召人の前景化が象徴する立体的な叙述は、第二部の世界の萌芽の一つと見ることができるのではないだろうか。

※『源氏物語』以下諸作品の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）によったが、『うつほ物語』の引用のみ室城秀之校注『うつほ物語　全　改訂版』（おうふう、平成七年）により、いずれも巻数及び頁数を示した。

【注】

（1）阿部秋生『源氏物語研究序説』上・下（東京大学出版会、昭和三四年）。

（2）武者小路辰子「中将の君　―源氏物語の女房観―」（同『源氏物語生と死と』武蔵野書院、昭和六三年）、三田村雅子「源氏物語における〈形代〉」・「召人のまなざしから」（同『源氏物語感覚の論理』有精堂、平成八年）、藤井貞和「「などやうの人々」との性的交渉」（同『源氏物語論』岩波書店、平成一二年）、秋山虔「召人について　―源氏物語読解例の一つ―」（『駒沢女子大学研究紀要』一号、平成六年一〇月）、斎木泰孝「「召人」となる女性　―寝覚の「対の君」」・「複合機能兼帯の新型女房と女性像　―「権北の方」と「召人」―」（同『物語文学の方法と注釈』和泉書院、平成八年）、木村朗子「平安文学における「召人」の方法―『源氏物語』宇治十帖へ―」（『叢書　想像する平安文学第七巻　系図をよむ／地図をよむ―物語時空論』勉誠出版、平成一三年）、原岡文子「女房―宇治十帖を中心に」（増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹編『源氏物語研究集成一一　源氏物語の行事と風俗』風間書房、平成一四年）など。

（3）類似の表現として「召し使ふ」という語も注意すべきものであるが、ここに指摘するに留める。

・この宮仕へする所の北の方うせたまひて、これかれある人を召し使ひたまひなどする中に、この人を思うたまひけり。思ひつきて、妻になりにけり。

（『大和物語』一四八段・蘆刈・三七六～三七七）

・（女三ノ宮ノモトデ）賄ひには、おとど（＝兼雅）の召し

使ひ給ひし人の、よき若人なりし、なほ衰へがたき、右近といふなむ、出で来て仕うまつりける。大将（＝仲忠）、「これや、かしこに、『忘れず、ありがたき人』とものし給ふならむ」。　（『うつほ物語』蔵開中・五六五）

・（乳母ガ帥宮ニ）「…（和泉式部ハ）なにのやうごとなききはにもあらず。使はせたまはむとおぼしめさむかぎりは、召してこそ使はせたまはめ。かろがろしき御歩きは、いと見苦しきことなり。…」　（『和泉式部日記』三〇）

（4）但し、ここは久曽神昇氏蔵勝命本では「こしうとめ」となっているようである（本多伊平『大和物語本文の研究　対校篇』笠間書院、昭和五五年）。

（5）斎木氏前掲「複合機能兼帯の新型女房と女性像　―「権北の方」と「召人」―」には、「女房名で呼ばれることこそなかったが、末摘花、花散里、明石上、さらには紫上、そして八宮の中君は、源氏や匂宮との関係において召人的性格を併せ持っていたように思えるのである。」とある。

（6）木村氏前掲論文。

（7）玉上琢弥『源氏物語評釈』六巻（角川書店、昭和四一年）。氏は、「兵部卿の宮は北の方が死んでおり、髭黒は北の方が精神病で、それで「召人」をおくのかもしれない。源氏も、お手つきの女房はいたが、「召人」とは呼ばなかった。」と述べており、「召人」を北の方不在やそれに準ずる事態にのみ許される特別な存在と解しているようである。

（8）玉鬘巻での筑紫に下る船中での、夕顔乳母子の贈答の場面（玉鬘③九〇）、胡蝶巻での船楽の際の、秋好中宮の女房四人の唱和の場面（胡蝶③一六七）、早蕨巻で匂宮邸に迎えられる中の君に従い宇治を離れる際の、大輔ら中の君付きの女房の贈答の場面（早蕨⑤三六二～三六三）の三例である。但しいずれも贈答二首（胡蝶巻では四首の唱和）全体で、女房たちの総意を示しているに過ぎず、一人一人の個人的な感慨を述べたものではない。

（9）三田村氏前掲「源氏物語における〈形代〉」・「召人のまなざしから」。

（10）召人は女房社会の中で上位に位置し、その他の女房たちとは厳然と区別される存在であることは、前掲の阿部氏、武者小路氏、木村氏などが指摘しているところである。

（11）三田村氏前掲「召人のまなざしから」。

（12）武者小路氏は前掲論文において、「中将の君にしても、中務の君にしても、一個の女性像としてとらえられるのではなくて、あくまで女房である分をこさない召人として、と言うよりさらに、源氏をとりまく女房たちの中にいる召人となるほどのよい女房像と言う設定の中にのみ生きているようである。」

と論じている。それを受けて原岡氏前掲論文では、六条御息所、玉鬘大君、今上女一の宮付きの中将の君などを例に、「中将の君」とは「女主人の分身さながら、極めてたおやかな魅惑を湛える女房の記号」であり、それが召人の名として受け継がれていくという図式を指摘する。

(13) 三田村氏前掲「召人のまなざしから」。

(14) 陣野英則「光源氏をもどく鬚黒　―出来損ないの〈色好み〉を形象化する〈語り〉―」(『中古文学論攷』一八号、平成九年一二月)。

(15) 三田村氏前掲「召人のまなざしから」。

(16) 縄野邦雄「玉鬘十帖の鬚黒について(1)　―結婚前の人物像を中心に―」(『武蔵野女子大学文学部紀要』一号、平成一二年三月)の、「藤袴巻で初めて明らかにされる情報を先取りして(胡蝶巻ヲ)読むことよりも、この場合、なぜ鬚黒は設定の重要な部分を伏せた形で語られる必要があったのか、その意味を考えることの方が大切であろう。」との指摘は大変示唆的であろう。

(17) 三田村氏前掲「召人のまなざしから」、伊藤博「「野分」の後　―源氏物語第二部への胎動」(同『源氏物語の原典』明治書院、昭和五五年)、西丸妙子「鬚黒北の方造型の意義」(今井源衛編『源氏物語とその周縁』和泉書院、平成元年)。なお、栗山元子「玉鬘物語の表現構造　―再生産される「若紫物語」―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四三輯、平成一〇年二月)は、玉鬘によって髭黒北の方が邸を追われるのは、女三の宮降嫁によって六条院内で起こりえた仮定を代行するものと指摘している。

(18) 伊藤氏は前掲論文で「ここには男女の愛に内在する本質的悲劇の胚芽がはらまれかけながら、物怪という不透明な要素が絡みついて、凝視の深化を妨げ」ていると指摘する。一方で、西丸氏前掲論文のように、「北の方が押さえ隠している苦悩の深さを物の怪によって測ることができるのである。物の怪という媒体を置くことによって、北の方の心の隈がはぎ取られ、悲劇はより深化させられた面があるのではなかろうか。」とする見方もある。

(19) 秋山氏前掲論文。

(20) 木村氏前掲論文。

(21) 伊藤氏前掲論文。